

<b>Title</b>	靈的なるものの回復
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.1, 1990.9 : 121-135
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2982">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2982</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 霊的なものの回復

大木英夫

### 1 <Truncation of Selfhood>

わたしは最近或る英語の神学書を読んでいたら、truncation of selfhood という表現に接した。この意味は円錐の頭の部分を切り取るということで、人間の自己という円錐の頭の部分が切り取られることを言い表している。日本語にはこのような表現はないのではないか。Truncated system という言い方もある。それは、たとえば、トマス・アクィナスの思想のように下が自然的、上が超自然的という二階建て構造の思想において、その上の部分が切り取られているような場合に用いられるようである。

しかしわたしは、この表現は、日本の精神的、文化的状況を表すのに、暗示に富むものだと思う。いや、日本だけでなく、広く近代精神、近代文化の状況を言い表すのに便利な表現であるように思われる。それは円錐の頭が切り取られた、まさに truncated system になっているということができる。

わたしは最近未来社から出版された『モーゼスおばあさんの絵の世界』という本を入手した。「モーゼスおばあさん」という名を知ったのは、アップダイクという評論家の文章においてである。次に引用するが、これは実に内容の深い、すばらしい文章である。

非常に高齢な人の死が自然のものでなく、不幸な出来事であるのは、若者の死と全く同様である。おそらく自然自身にとってのみ、死は自然なものに見えるのだろう。いや自然自身さえ、そこまで割り切れるものではあるまい。にもかかわらず、アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼスの今や終結した生涯を振り返ってみて、私は明るい気持ちになってしまうのだ。農家の主婦、十人の子の母として一つの生涯を生きした後で七十六歳にして、もう一つの、画家としての、グランマ・モーゼスとしての、生涯を始め、しかも仕事一筋の、実り多い第二の生涯を二十五年にわたってまっとうした。平凡人の限界をここまで克服しえた人を前にすると、悲しみは湧かないものだ。たとえ悲しむとしても、われわれ自身のために悲しむだけだ。彼女は百歳になるまでに、あたかも古い建物が都市に風格を添え、円錐形の教会の尖塔が風景にまともりを与えるように、この世界に安定感を与えてくれる老人の一人になっていた。ショーとブランクーシはそんな人だった。チャーチルとシュヴァイツァーは今もなおそんな人だ。彼らがこの世を去りたがらないということ自体が、この世に対する賞賛なのであり、この未練は祝福にまでなっている。老人の知恵というものは今日、語られることが少ない。恐らくこの知恵は恐れられているのだ、悲哀を含んでいるから。しかし厄介な真理も表現のしかたで恵み深い、明るいものとなりうる。

自分の画法に触れて、モーゼス夫人はかつて述べたことがある。「私は上から下に描いていきます。はじめに空、それからやま、丘、家、家畜、人、という順序で」と。

ここに尖塔という言葉がでてくる。ヨーロッパの古い町は教会の尖塔を仰いでいる。しかし、日本の町にはそれが無い。多少の高層建築ができたとしても、尖塔がない。平板な印象を与える。或いは人間世界におけるモーゼスおばあさんのような存在がないという内面的事実の外面的表現なのかもしれない。内面的 truncation の、外面的な印象であるのかもしれない。

この〈truncated system〉の典型は、明治政府がたてた「帝国大学」である。それはドイツの大学の模倣であったが、その際、それは、ドイツの伝統的大学の重要な学部としての「神学部」という尖塔部分をカットしたものであった。それが近代日本の学問と教育を規定し、その中から科学技術面で優秀な人材を産み出したことは事実であったが、その人間は、まさに〈truncation of selfhood〉という切除を受けた形態であった。

## 2 「霊と心とからだ」

第一テサロニケ五・二三に、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全きよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責

められるところのない者にして下さるように。」という言葉がある。ここにパウロの人間理解が典型的に出ている。それは「霊と心とからだ」という三層構造になっているということである。普通、精神と肉体とか、理性と肉体とか、二層構造で考えられている。それに対して三層構造で考えるということは、あたかもラジオの受信の幅が大きいようなもので、普通の波長のものだけでなく、FMもはいるというのに似ている。パウロは、普通の「心とからだ」という二層構造に対して、その上にもう一つの「霊的次元」があることを見ているのである。truncation of selfhood という場合に、そこで Truncate されているのは、この「霊的次元」ということではないだろうか。それが切除されて、いわば、霊的次元の電波をうけるアンテナがなくなつた状態になっている。それが日本の状態、いや、近代世界の状態ではないだろうか。とくにこれは日本における文化や教育の状態を表していると言えるのではなからうか（ティリッヒは「層」という言葉と「次元」という言葉を区別するが、ここでは区別しないで用いる）。

わたしは、東神大の同僚である J・D・リード教授に truncation という言葉の用い方について聞いた。したら、霊的 (spiritual) ということが分からないには、アングロ・サクソン世界も同じだということを言われた。そして、その点ではゲルマン民族が勝れている、と言われた。たしかにそれは一理ある言い方であるように思う。昔のことだが、ヘーゲルの『精神現象学』(Phänomenologie des Geistes) は、Phenomenology of mind と訳された。(Geist) と (mind) とは、微妙に違う。それは英語においては、ドイツ語の「ガイスト」と合致する言葉がないという事情を示すものである。勿論、聖書に言う「プニエウ

マ」を「ガイスト」と訳すのでよいかという問題もあろう。しかし英語で「スピリット」がうまく捉えられないということは注目に値することと言わねばならない。聖霊を、英語では、Holy Ghost と言う（ティリッヒは、この言い方をきらう）。「ゴースト」とは幽霊である。ハムレットに現れた父王の幽霊のようなものである。これでは「霊的なもの」は分からない。

こうして「霊的次元」とは荒唐無稽なものとなり、現代人の話題から失われた。そして 人間の関心は、「心とからだ」だけとなった。霊的次元は萎縮し、衰弱し、退化してきた。

J・D・リード教授は、アングロ・サクソンにおける「霊的なもの」の衰弱を、プラグマティズムの結果と見た。しかし、わたしは、それはもっと深い背景をもっていると思う。もっとさかのぼって、おそらく、英国の経験論哲学は「霊的次元」を truncate する影響を与えたということもできるであろう。ロックよりもヒュームは更に首尾一貫している。それは自然科学の発達によって一層決定的になって行く。英国の経験論に対して大陸の合理論が言われるが、合理論もまた、例えばデカルトの cogito, ergo sum の主張によって、「心とからだ」との対立が規定され、かえって「霊的なもの」の次元が分からないものとなった。

### 3 知識の増大と超越の次元の喪失

わたしは、『教育の神学』の中の論文で、この「霊的なもの」の欠落の源流を、第十三世紀のトマス・アク

イナスとボナヴェントゥラとの対比から説明をしたことがある。どちらもパリ大学の教授であった。ボナヴェントゥラは、トマス・アクィナスの思想が下から上へと上昇するという行き方をとるのにたいして、「それはスキエンチアを増大させるが、サピエンチアは壊される」と見た。ティリッヒは、近代の経験論や科学一般の行き方は、このトマス・アクィナスに起源を持つと考えた。そしてどこが違うかという点と、近代の思想は、先にのべたような truncated system になっているということである。ボナヴェントゥラはトマス・アクィナスに反対して、上から始めねばならないと主張した。それはちょうどモーゼスおばあさんの画法のようである。こうして今日の「霊的なもの」の萎縮、衰弱という現象が起こったのである。

しかし、この思想史の発展、或いは退化の過程を振り返ってみて、われわれは次の一点に注目しなければならない。それはからだが失われることはない（病気はあるが）、理性も失われることはない（狂いはあるが）、しかし、「霊的なもの」は失われるということである。 Spiritum nolite extinguere（「霊を消すな」という言葉が、先に引用した第一テサロニケの個所のすぐ前にある。それは「聖霊」を言っていると解釈されているが、しかし、これは一般に「霊的なもの」にも妥当する。それは消される。それにもかかわらず、パウロが「霊と心とからだ」と言った三層構造が人間の本性であるとすれば、それは無くなって無くならないという、いささか逆説めいた言い方でしか言えない事情であると言わねばならない。或いはそれが「無くなっていない」としてそれを自覚的に回復しようとする哲学的な試みが起こり、或いは無自覚的にそれが「無くなっていない」という事態を分析する社会学的な試みが起こる。ティリッヒは、近代の、とくにアング

ロ・アメリカの知性が technical reason しか知らないことを批判し、それに対して ontological reason を回復することを強調する。社会学者ヒーター・パーガーの有名な書『天使のうわさ』は、近代的知性に見失われた「超越」の次元が社会的に現象している事例を指し示している。また最近はまだ宗教ブームとか言い、或いはオカルティズムの流行など、さまざまな仕方です。「靈的次元」の存在を暗示するものもある。あるいは「深層」という言葉も、近代における理性主義では処理できない次元の存在を示している。流行という現象、これは社会心理学だけでは捉えることはできない。また近頃「情報」ということが言われるが、情報の作用範囲もまた、人間の靈的次元を考慮に入れることなしには見極めることはできない。山本七平氏の『風の研究』という本は、やはりこの「靈的次元」に関わる議論である。「靈」とはヘブル語においてもギリシャ語においても「風」を意味し「空気」を意味する。それはまた悪靈の問題とも関連する。しかし、その方面のたたかいは混迷状態と言ってよい。

わたしは最近テレビで星野富弘という人の特集をみた。そこにキリスト教の偉大な力を見たのであるが、また同時にそこに「靈的次元」の世界があることの証明も見出した。それはローマの詩人ユウェナリスのいう mens sana in corpore sano (健康な精神は健康な肉体に) という二元構造では捉えられない次元があり、その次元の働きが、傷ついた肉体にあって精神の健康を守っているという事実を知った。

#### 4 聖学院大学の理念

先の引用聖句にあるように、「霊と心とからだ」の三層全体は「守られ」ねばならない。しかも「完全に」「守られ」ねばならない。それでないと、この歴史の中で、キリストの再臨の前で、それは破壊される可能性をもっているからである。この聖書の教えは、われわれに今日の文化的・教育的課題を思い起こさせる。

この事情の認識において、今日のキリスト教学校の使命を反省してみたい。もし今日の文化が truncated system であるなら、その問題とどう取り組むかが課題となる。日本は、西欧諸国における truncation とは異なる要素をもそれに含んでいる。ここにパウロが言う「霊的次元」の欠落は、日本本来のその次元の欠落の度が、西欧近代思想の影響によって或る種の強化を受けたものとなっているからである。だから日本において「霊的なもの」は、壊れたテレビのようなもので、受像されないものとなっている。

この状況を凝視しながら、われわれは今新しい大学として「聖学院大学」を構想するに当たって、議論を経た後であるが、あえて「霊的」(引用には傍点を附した)という言葉を用いた。「聖学院大学の理念」においてこう述べられている。

1 本大学は、プロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によって、真理を探索し、霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せんとする者の学術研

究と教育の文化共同体である。

3 プロテスタント・キリスト教は、特に近代世界の成立と展開に独特な貢献を果してきたが、それゆえまた、現代社会において固有な責任を負っている。本大学は真剣な学術研究と生きた教育、靈的強化とを通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする。

8 教授は、福音的自由と真理への畏敬の念を持って、学問的探求に鋭意努力し、その研究と教育を通して、時代の課題に積極的に応えつつ、新しい世代の知的、実践的、靈的次元での育成に努め、本大学の精神、学問、伝統の確立と継承、および新たな創造に努めることが期待される。

9 学生は、知的、実践的のみならず靈的次元において成熟し、かつ専門の学問の研鑽とその応用力の修得に努め、現代社会の課題に取り組み、明日の社会を担い得る教養と良識とを身につけ、豊かで個性的な人格形成に努めることが期待される。

以上のように、はっきりと「靈的」という言葉を用いたわけだが、これは以上のような時代認識に基づいた「決断」でもあった。何か文化的・教育的な戦場に赴くような決断であった。しかし思うにこのような課題は、新設大学だけでなく、すべて日本におけるキリスト教大学、諸学校の、回避できないものであると思う。その時必要なことは、この「戦場」の状況を正確に把握し、それに対処するということである。そのためわたしは、神学の必要とそれへの習熟が求められていることを、指摘せねばならない。明治の帝国大学

における〈truncated system〉の中で形づくられた人間、〈truncation of selfhood〉を受けた欠陥的知性では、この問題の認識もできないし、それ故その問題と取り組むこともできない。しかも残念ながら神学にいろいろなものがあるということも認識し、その関係を選ばねばならないと思う。わたしは、東神大の学長のとき、キリスト教諸学校が東神大と結びつくことの必要を、賛助会の組織強化という仕方で訴えたことがある。それは寄付集めというレヴェルの問題に解消されてはならない、むしろ日本におけるキリスト教学校の使命達成のための大勢を自覚的に形成するということを目指したものであった。それは何よりも先ず、キリスト教学校なるが故に見なければならぬもの、キリスト教学校なるが故に取り組まねばならぬものに対して、正しく見、かつ対処するためである。霊的次元との取り組みは、とりわけ「神学」の課題からである。そのようにして、現代文明におけるキリスト教学校の歴史的位位置と意義とを明らかにし、それを自覚し、そして課題と取り組むようにしなければならない。

## 5 「自由の伝統」の継承と「霊的次元」の回復

第一に言ったことは、言わば思想史的な自己理解である。別様に言えば、キリスト教学校なるが故に背負っている「伝統」をはっきり捉え直すことである。キリスト教学校は大変な文化的遺産相続人である。東神大に今度図書館が新設されたが、図書館とはそれを文書貯蔵という具体的形態において表しているものであ

る。それだけでなく、いろいろな仕方でもキリスト教学校は「キリスト教的伝統」を継承している。そのことを明らかにすることが第一のことである。それは直接的には「ミッション」との関係、教派的背景であり、また大きくはプロテスタント的キリスト教に繋がり、あるいは、キリスト教、また旧約聖書をもつことによつてユダヤ教とのかかわりにまで至る壮大な歴史である。それらを受け継いでいる。

しかし、その伝統は、継承の主体なしには存続できない。その継承の主体が、それぞれのキリスト教学校において確立され、そして明確に自覚されねばならない。理事会、教授会がそれぞれ異なる機能において、重要な担い手になることは当然である。担い手になるのは、その伝統の理解者、なければならぬ。ちょうどカトリシズムにおける「ヒエラルキア」がその伝統の担い手として要求されたように、その体制の強弱はともかく、プロテスタントリズムにおいても、その種の担い手の形成と確立とは不可欠である。ところがプロテスタントリズムにおいては、「伝統の継承」という意識がなく、その「自由」を誤解し、かえつて「肉の働く機会」にしてしまうのである。しかし、この主体の確立なしに、今日キリスト教学校が戦うべき戦場に出る行くことはできない。この伝統の生きた継承者がいないところから、いわゆる「クリスチャン・コード」問題のような律法的な対処が出てくる。わたしは、この状況では、「クリスチャン・コード」は、第二テサロニケ二章七節の「阻止している者」というような役割をもつ故に、これ以上の崩壊を阻止し、キリスト教学校の再建へと転向する機会を掴むためにも、必要な制度であると思う。しかし「自由の伝統」は、その「自由」の価値を知る生きた本物の継承者を必要としているのである。その生きた伝統継承は、キャンパス内で

——教授であれ職員であれ——キリスト者となるという出来事が継続的に起こるということによって立証されなければならない。そのことによって「クリスチャン・コード」が律法でなく、キリスト教的生命力のあるしとなり得るのである。

そこで、この主体の確立と関連して、もう一度キリスト教学校が受け継いでいる伝統の内容は何かということを考えて見なければならぬ。わたしはそれを「自由の伝統」と呼んできた。キリスト教において「靈的」という時、それは何かオカルト的なことを言っているのではないことは言うまでもない。パウロが人間を「靈と心とからだ」とに三分法で捉えた、その「靈」の次元とは、「自由」の次元のことなのである。理性の背後、理性の上方にある次元である。理性も肉体も、それによって支配されているような高次の次元である。その次元で「自由」が実現され、自覚されねばならない。それは人間を束縛しているあらゆるものの根底にある究極的な束縛からの解放（＝自由）である。このような自由は、死からの解放としての復活に対応しており、それ故復活信仰によって自覚され、また確立されるであろう。

聖書が「聖靈」というのは、まさにこの「靈的」次元で理解されねばならない。ここに述べたそのような解放が聖靈の経験なのである。単なる生得的な能力ではない。生得的宗教性ではない。だからそれを「情操」（感情のうち、道徳的、芸術的、宗教的などの社会的価値をもった複雑で高次なもの——広辞苑）ということも曖昧である。それはもつとはっきりした内容をもったものである。それを聖靈によって人間がもつことになる「信仰」である。キリスト教における「信仰」は、「信心」のような宗教性ではない。それは人間がそ

の生得の能力で造りだせるものではない。それは人間がその生得の能力を發揮して獲得した状態ではなく、人間が受容した解放の経験である。人間は自分を自分から解放できない。人間は、外から牢獄の鍵が開けられねばならないように、外から解放されなければならない。外から、或いは上から、來臨する自由、我を超え、我がものとは思えぬ自由、人間が自分の自由をもっては自分を解放できない最後に残った束縛からの究極的な自由、それは上から与えられるものである。このようにしてキリスト教は、たしかに人間における自由を確かめ、強め、自由を共通の文化的財産のように客観化し、いわば社会資本のような文化価値としてきたのである。それが欧米のキリスト教的文化価値としての「自由の伝統」なのである。そのことをよく認識した上ならば、「情操」という言葉を用いてもよいだろうが、キリスト教教育を淺薄に宗教的情操教育と言つてはならないだろう。もし今日キリスト教学校が、その使命を自覚し、現代の問題に取り組むとするならば、この文化価値を、その形成の過程において歴史的に認識し、またその形成力の根源を神学的に捉え直さねばならないであろう。

この次元が未熟であるため、今や科学技術の發達によって増大された外的「自由」が洪水のように世界を押し流している。しかしそのような仕方では現代は、肉的になったかというところ、実はそうではなく、かえって「靈的」になつていくのである。靈的な次元を捉えそこに正しく生きることの訓練なしに、靈的になつていく、ということである。だから悪い意味で、いろいろ「靈的」なものに捉えられやすくなつていたのである。この次元は、未熟なまま、各種の靈的な活動の場となつていく。今日の問題は、結局は「自由の問題」なの

である。靈的次元の問題である。それと取り組むのは、この次元において成熟した者であり、また靈的に成熟した者を養う教育機関でなければならぬ。その成熟は、ただ「自由の伝統」の正しい継承という仕方でのみ起こるであり、それ以外に可能性はない。また「自由の伝統」によって支えられることなしに、言わば無手勝流でその課題に取り組めるものでもない。無手勝流には塚原ト伝のいわゆる賢明な戦いの意味もあるが、辞書によれば最後に「師伝によらず自分で勝手に定めた流儀、自己流」ということである。どうもキリスト教学校はこの種の自己流になっているのではないか。とくにそれが「キリスト教学」や「聖書学」の教育にでている。先に戦場に赴くというたとえ話をしたが、そこで重要なのは「決断」とか「判断」とかである。戦後キリスト教学校は発展していたが、もしキリスト教学校が現代社会で果たすべきよきたたかいを戦うためにも、特にそのアドミニストレーションに携わる責任者たちは、この「自由の伝統」の継承者として、その伝統をどう生かすかを基本において判断し、決断して行かねばならない。ところがそうでなく、自己流に伝統を生かさない形でそうする、つまり無手勝流になる、そしてその力を失ってきたのではないか。

## むすび

はじめの問題に立ち戻り、現代世界の今日的な問題は、その靈的次元の問題である。そしてそれと取り組むのは、たんなる曖昧な宗教性とか、宗教的情操とかではなく、あのグランマ・モーゼスが言うように、「上

から」始め、「聖霊によって」健全化された靈的な力をもってなされねばならない。創世記にあるように、人間が神から息（＝靈）を吹き込まれることによって「生きる者」（創世記二・七）となったということは、今日にも妥当する真理であると思う。アップダイクの言う尖塔のある光景、それがキリスト教学校のキャンパスにもなければならぬ。そのようにして、今日の社会や人間における靈的次元の切除された状態、〈truncation of selfhood〉、〈truncated system〉からの回復が、キリスト教学校の特別の使命となると思う。今日のキリスト教学校は、そのような重大な課題を担わされている、というのがわたしの所感である。

（キリスト教学校教育同盟関東部会での講演原稿 於青山学院大学 1988.5.19）